

大学適応感の変化に関する一考察 — 教職課程履修生を対象とした縦断調査より —

A study about a change of a feeling of university adjustment

太田伸幸[†], 甲村和三^{††}, 児嶋文寿^{†††}

OTA Nobuyuki, KOHMURA Kazumi, KOJIMA Fumitoshi

Abstract: In this study, it was discussed that the change of decreased motivation and feeling of university adjustment, and the factors that bring about change. Of those surveyed offerings as being principles of education in the first semester and educational psychology in the second semester for the first grade education course who take. 53 undergraduate (40 were freshman, 13 were upperclassman) surveyed all. The survey was conducted 4 times (April, July, September and January). As a result, it was cleared that between a change in the first semester and in the second semester were different factors existed for freshman. In first semester, "self-expression skills" was university adjustment for freshman influence. In contrast, "inviting sense" was them strong influence in the second semester. It was showed that initial state of adaptation in the first semester was university adjustment in the second semester affect. Therefore, it was suggested that after initial adaptation of university entrance support was required to adapt smoothly into university for freshman.

1. 問題と目的

1・1 意欲低下の特徴

大学では、高校までの様なクラス単位での活動が減少する。クラス指定がある授業でも、履修の便宜を図るためのクラス編成であり、集団として活動する必要があるわけではないことが多い。そのため、対人関係の形成は個人の資質によるところが大きくなり、大学生活において有効な対人関係の形成ができないことが、大学不適應を生ずる原因となることも考えられる。

下山 (1995) は男子大学生の無気力の構造について、アイデンティティの確立、アパシー心性、意欲低下領域を用いて因果モデルの検討を行った。その結果、授業・学業意欲低下と大学意欲低下は非連続で質的に異なる次元上に存在することを示した。学業に対する意欲低下は授業に対する意欲低下からもたらされるが、大学意欲低下は、アパシー心性からもたらされることが明らかとなった。

また、溝上 (2004) は、学業意欲と授業意欲も異なる次元で機能することを示した。溝上は、大学1・2年生を対象に、調査時期により5つの時期に分類し、横断的に比較

した。学業意欲は入学期から一貫して変化は見られないが、それはもともとあまり高くない学業意欲が変化していないだけであった。それに対して授業意欲は、1年生後期、2年生と段階を経て低下していた。

1・2 意欲低下の要因

溝上 (2004) は、さらに1年生前期を対象に縦断調査を実施し、意欲低下の特徴と大学観との関連について検討した。大学観の結果から、大学を勉強の場ととらえる価値観は高い水準で維持されているが、消極的モラトリアムを過ごす場としてとらえる考え方は、1年生前期という短い期間においても上昇していることが示された。また、授業意欲のみ低下しており、下山 (1995) の結果を支持している。

この授業意欲低下に関連する要因として、半澤 (2007a) は、大学進学時における学業に対するリアリティショックをあげている。学業に対するリアリティショックとは、大学入学前に思い描いていた講義の内容や学業生活と、入学後に受けた講義の内容や学業生活との間のズレを指す。このズレが大きければ大きいほど、学業に対するリアリティショックは大きいと考えられる。特に、教員不満と講義内容不満が授業意欲低下および学業意欲低下の双方と有意な相関が認められていた。さらに半澤 (2007b) は学業に対して適応的だと考えられる学業志向群であっても、入学

[†] 中部大学 現代教育学研究所 (春日井市)

^{††} 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

^{†††} 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

後学業不適応に陥る可能性を指摘した。

1・3 大学適応感との関連

半澤 (2007a, 2007b) では学業面での適応からの影響を指摘しているが, 太田 (2004) は対人関係認知の面から検討し, 対人的な社会的スキルが高いと大学意欲低下は抑制されることを示唆した。また, 大学環境への適応感と意欲低下の影響の検討では, 大学生活の中でやるべきことが見いだせないことが大学や学業への意欲低下に結びつくことが明らかとなっている (太田, 2006)。

この大学環境への適応について, 大久保・青柳 (2003) は, 個人と環境の整合性の観点から大学適応観尺度を作成した。そして, 社会的スキルによる影響を検討したところ, 大学学当初の社会的スキルは, 後の大学適応を予測する指標としては不十分であるという結果が示された (大久保・青柳, 2005)。ただし, 測定時点での社会的スキルと大学適応感の相関は高いため, 大学入学後の社会的スキルの発達と大学適応との関連を否定するものではない。

1・4 本研究の目的

このように意欲低下に影響する要因として, 大学適応感や大学に対する価値付けなどが影響すると考えられるため, 意欲低下や大学適応感に関して, 定期的に測定し, その変化を追跡することが重要である。したがって, 本研究では, 1年を通した縦断調査を実施し, 意欲低下および大学適応感の変化, およびその変化をもたらす要因について検討する。

2. 方法

2・1 調査対象・実施時期

教職課程 1年生を対象として開講されている, 教育原論 (前期), および教育心理学 (後期) の履修者を対象とした。両講義とも, 教職課程の講義を履修する学生には必修科目として課している。また, 2年次から新規に教職課程を履修する学生や再履修者も存在するため, 調査対象者の約 3分の1は 2年生以上の学生であった。各回の調査対象者の内訳を Table1 に示した。すべての回の調査で対象者となったのは 53 名 (1年生 40 名, 上級生 13 名) であった。

Table1 各回の調査対象者

	全体	1年生	上級生
第1回(4月)	89	68	21
第2回(7月)	80	62	18
第3回(9月)	70	44	26
第4回(1月)	73	47	26

2・2 調査内容

各回の調査項目は, 4回の調査で共通する尺度と, 各回ごとに異なる尺度から構成した。各回の調査で使用した尺度の一覧を Table2 に示した。

1) 意欲低下領域尺度 (15 項目)

下山 (1995) が作成した大学生活における意欲低下の程度を測定する尺度「学業意欲低下」「授業意欲低下」「大学意欲低下」の 3 つの下位尺度より構成される。「あてはまらない(1)」～「あてはまる(5)」の 5 件法で回答を求めた。

2) 大学生用適応観尺度 (29 項目)

大久保・青柳 (2003) が作成した, 大学環境への適応観を測定する尺度。「居心地の良さの感覚」「被信頼・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感の無さ」の 4 つの下位尺度より構成される。「あてはまらない(1)」～「あてはまる(5)」の 5 件法で回答を求めた。

3) 大学観尺度 (25 項目)

杉浦・尾崎・溝上 (2003) が作成した, 学生が大学をどのような場だと認識しているかを測定する尺度である。「出会いの場」「消極的モラトリアムを過ごす場」「勉強の場」「自分探しの場」「将来準備の場」の 5 つの下位尺度より構成される。「あてはまらない(1)」～「あてはまる(5)」の 5 件法で回答を求めた。

4) 社会的スキル尺度 (18 項目)

菊池 (1988) が作成した Kiss-18 を使用した。「いつもそうではない(1)」～「いつもそうだ(5)」の 5 件法で回答を求めた。

5) 日常的出来事尺度 (40 項目)

外山・桜井 (1999) において作成した大学生が日常的に経験する出来事に関する尺度である。「自己に関するネガティブな出来事」「対人関係に関するネガティブな出来事」「大学生活に関するネガティブな出来事」「私生活に関するネガティブな出来事」「自己に関するポジティブな出来事」「対人関係に関するポジティブな出来事」の 6 つの下位尺度より構成される。この尺度では, 出来事に対して, 経験の頻度とそのときの感情について回答を求めることになる。まず, 前期 (後期) の間における各出来事の経験の頻度を「全くなかった(0)」～「よくあった(3)」で回答を求めた。次に経験がある出来事に対して, そのときの感情を「悪かった(-3)」～「良かった(+3)」の 7 件法で回答を求めた。

6) 重視している活動 (12 項目)

岩田・北條・浜島 (2001) において示された活動に対して, どれくらい大学生活の中で重視しているかを尋ねた。「全く重視していない(1)」～「とても重視している(5)」の 5 件法で回答を求めた。

7) アパシー心性 (15 項目)

下山 (1995) が作成した, アパシー心性尺度の下位尺度の

うち、「適応強迫」の項目を除いた「張りのなさ」「自分のなさ」「味気なさ」の項目を用いた。「張りのなさ」は生活の張りがなくなっている状態を示す。「自分のなさ」は自己不確実な心理状態を示す。「味気なさ」は生活全般に味気なくなっている状態を示す。「あてはまらない(1)」～「あてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

Table2 各回の調査で使用した尺度

尺度名	
第1回(4月)	意欲低下領域尺度 大学生用適応観尺度 大学観尺度 社会的スキル尺度
第2回(7月)	意欲低下領域尺度 大学生用適応観尺度 日常的出来事尺度 重視している活動
第3回(9月)	意欲低下領域尺度 大学生用適応観尺度 大学観尺度 アパシー心性
第4回(1月)	意欲低下領域尺度 大学生用適応観尺度 日常的出来事尺度 重視している活動

2・3 実施手続き

調査は各学期の2回目および14回目の講義時間内に実施したため、第1回調査が4月、第2回調査が7月、第3回調査が9月、第4回調査が1月となった。各回の調査対象者の回答の対応をはかるため、全ての回でフェイスシートにて学籍番号の記入を求めた。ただし、教示にて学生の回答内容を特定することには用いないことを強調し、データの対応をはかった後は学籍番号のデータを消去することを約束した上で、調査を実施した。

3. 結果

3・1 各回の調査の記述統計量

まず、社会的スキル尺度に関して因子分析（主成分分解、promax 回転）を行い、固有値の減衰状況と因子解釈の妥当性から3因子を抽出した（Table3）。因子寄与の低い2項目と複数の因子に寄与が高い1項目を除いたため、各5項目より構成され、第1因子より順に「課題遂行スキル」「会話スキル」「自己表現スキル」と命名した。他の尺度は先行研究に基づき下位尺度を構成し、下位尺度ごとに評定平均値を算出した。

3・2 意欲低下・大学適応感の比較

意欲低下および大学適応感の各下位尺度について、半期

Table3 社会的スキル尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3
第1因子『課題遂行スキル』			
仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか	.947	-.160	-.194
他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.862	-.021	-.022
仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか	.843	-.070	-.060
あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.674	.062	.025
こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.579	.262	.080
第2因子『会話スキル』			
まわりの人とでもすぐに会話が始められますか	-.096	1.036	-.194
知らない人とでもすぐに会話が始められますか	-.118	.993	-.165
初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.111	.557	.218
他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	.209	.465	.205
他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.276	.447	.218
第3因子『自己表現スキル』			
何か失敗したときにすぐに謝ることができますか	-.080	-.134	.901
まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか	-.089	.045	.780
自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか	-.360	.202	.766
相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.167	.048	.615
相手から非難されたときにもそれをうまく片付けることができますか	.175	.227	.488
残余項目			
仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	.390	.060	.055
気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.179	.346	.297
他人を助けることを、上手にやれますか	.154	-.449	.736
因子間相関			
	F1	F2	
	F2	.402	
	F3	.560	.577

の間の変化(前期は 4 月と 7 月, 後期は 9 月と 1 月の比較)を t 検定を用いて比較した (Table4)。

前期における比較では, 被信頼・受容感の値が上昇し ($t=-3.30, p<.01$), また授業意欲低下の値も上昇していた ($t=-7.99, p<.001$)。後期における比較では, 有意差を示す下位尺度は認められなかった。

次に, 1 年生のみで同様の t 検定を行ったところ, 全体の結果に加えて, 前期の拒絶感の無さの値が減少し ($t=2.65, p<.05$), 後期の授業意欲低下の値が上昇していた ($t=-2.10, p<.05$)。

3・3 大学観の比較

大学観は各学期の初めで調査をしているため, 4 月(前期 2 回目講義)と 9 月(後期 2 回目講義)の比較となる (Table5)。この 2 回の平均値の比較を行ったところ, 消極的モラトリアムを過ごす場の値が上昇し ($t=-2.60,$

$p<.01$), 勉強の場の値が低下していた ($t=2.65, p<.01$)。

同様に 1 年生のみで比較したところ, 全体での結果に加えて将来準備の場の値が低下していた ($t=2.22, p<.05$)。

3・4 日常的出来事の比較

各学期の終わりに, その学期における日常的出来事の経験率を調査しているため, 7 月(前期第 14 回講義)と 1 月(後期第 14 回講義)の比較となる (Table6, Table7)。

全体で 8 割以上の学生が経験している出来事は, 「学業上のことで失敗した」(80.0%, 7 月), 「自分の将来について考えた」(87.5%, 7 月), 「授業がつまらなかった」(88.8%, 7 月; 86.3%, 1 月), 「時間に追われた」(88.8%, 7 月; 86.3%, 1 月), 「睡眠時間が少なかった」(87.5%, 7 月; 83.6%, 1 月), 「授業が楽しかった」(95.0%, 7 月; 87.7%, 1 月), 「前から欲しいものが手に入った」(84.9%, 1 月), 「友人が増えた」(97.5%, 7 月; 87.7%, 1 月), 「大学生活

Table4 大学適応感・意欲低下領域の平均と標準偏差

	4月		7月		t値	9月		1月		t値
	平均	SD	平均	SD		平均	SD	平均	SD	
全体										
居心地の良さの感覚	3.24 (0.72)		3.38 (0.77)		-1.64	3.39 (0.62)		3.30 (0.62)		1.58
被信頼・受容感	2.69 (0.72)		2.97 (0.86)		-3.30 **	3.02 (0.74)		2.99 (0.85)		0.30
課題・目的の存在	3.55 (0.67)		3.44 (0.80)		1.32	3.56 (0.64)		3.46 (0.78)		1.14
拒絶感の無さ	3.79 (0.65)		3.65 (0.72)		1.85 +	3.63 (0.74)		3.63 (0.77)		0.00
学業意欲低下	2.81 (0.69)		2.93 (0.70)		-1.94 +	2.95 (0.70)		2.88 (0.75)		0.96
授業意欲低下	1.97 (0.83)		2.63 (0.95)		-7.99 ***	2.38 (0.90)		2.55 (0.81)		-1.88 +
大学意欲低下	2.32 (0.70)		2.35 (0.72)		-0.42	2.36 (0.74)		2.28 (0.82)		0.89
1年生										
居心地の良さの感覚	3.26 (0.72)		3.42 (0.75)		-1.46	3.34 (0.57)		3.31 (0.60)		0.48
被信頼・受容感	2.58 (0.68)		2.89 (0.86)		-2.96 **	2.93 (0.66)		2.83 (0.78)		0.76
課題・目的の存在	3.64 (0.66)		3.46 (0.81)		1.69 +	3.55 (0.64)		3.49 (0.71)		0.62
拒絶感の無さ	3.82 (0.65)		3.59 (0.67)		2.65 *	3.62 (0.72)		3.56 (0.77)		0.64
学業意欲低下	2.78 (0.72)		2.93 (0.70)		-1.98 +	3.04 (0.74)		2.91 (0.67)		1.48
授業意欲低下	1.93 (0.82)		2.72 (0.96)		-8.20 ***	2.39 (0.92)		2.62 (0.77)		-2.10 *
大学意欲低下	2.22 (0.69)		2.32 (0.69)		-1.03	2.34 (0.80)		2.24 (0.70)		0.78

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table5 大学観の平均と標準偏差

	4月		9月		t値
	平均	SD	平均	SD	
全体					
出会いの場	3.97 (0.91)		3.93 (0.83)		0.26
消極的モラトリアムを過ごす場	2.40 (0.69)		2.64 (0.86)		-2.60 **
勉強の場	4.38 (0.62)		4.12 (0.73)		2.65 **
自分探しの場	4.06 (0.71)		3.89 (0.75)		1.62
将来準備の場	4.17 (0.63)		4.01 (0.61)		1.69 +
1年生					
出会いの場	4.17 (0.67)		3.93 (0.81)		1.58
消極的モラトリアムを過ごす場	2.34 (0.69)		2.61 (0.81)		-2.83 **
勉強の場	4.51 (0.48)		4.11 (0.77)		3.95 ***
自分探しの場	4.12 (0.70)		3.91 (0.77)		1.82 +
将来準備の場	4.28 (0.57)		4.03 (0.62)		2.22 *

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

が楽しかった」(88.8%, 7月; 86.3%, 1月)であった。

1年生のみで見ると、「学業上のことで失敗した」(80.9%, 1月), 「自分の将来について考えた」(85.5%, 7月), 「授業がつまらなかった」(87.1%, 7月; 91.5%, 1月), 「時間に追われた」(87.1%, 7月; 85.1%, 1月), 「睡眠時間が少なかった」(88.7%, 7月), 「授業が楽しかった」(96.8%, 7月; 89.4%, 1月), 「前から欲しいも

のが手に入った」(85.1%, 1月), 「友人が増えた」(98.4%, 7月; 89.4%, 1月), 「大学生生活が楽しかった」(87.1%, 7月; 89.4%, 1月)であった。

全体においても1年生のみでも, 対人関係に関するネガティブな出来事の実験率は低く, ポジティブな出来事の実験率は高かった。

Table6 日常的出来事の実験率(全体)

項目	7月	1月
自己に関するネガティブな出来事		
学業上のこと(試験, レポートなど)で失敗した	64 (80.0%)	57 (78.1%)
自己嫌悪におちいった	49 (61.3%)	47 (64.4%)
自分の能力適性について考えた	61 (76.3%)	56 (76.7%)
将来の職業(選択)について考えた	70 (87.5%)	58 (79.5%)
自分に自信がなくなった	45 (56.3%)	44 (60.3%)
太った	36 (45.0%)	27 (37.0%)
自分の性格について考えた	56 (70.0%)	55 (75.3%)
生活にはりがなかった	42 (52.5%)	40 (54.8%)
計画が実行できなかった	54 (67.5%)	50 (68.5%)
自分の容姿が気になった	53 (66.3%)	49 (67.1%)
対人関係に関するネガティブな出来事		
バイトがきつかった	34 (42.5%)	43 (58.9%)
クラブやサークルでの人間関係がうまくいかなかった	22 (27.5%)	22 (30.1%)
友人関係がうまくいかなかった	32 (40.0%)	32 (43.8%)
恋人が欲しいのにできなかった	38 (47.5%)	36 (49.3%)
友人の悩みやトラブルに関わりを持った	48 (60.0%)	39 (53.4%)
クラブやサークルに不満を持った(試合に負けた, 活動がつまらなかったなど)	22 (27.5%)	22 (30.1%)
大学生生活に関するネガティブな出来事		
大学に不満を持った	58 (72.5%)	51 (69.9%)
授業がつまらなかった	71 (88.8%)	63 (86.3%)
大学生生活が楽しくなかった	42 (52.5%)	36 (49.3%)
私生活に関するネガティブな出来事		
時間に追われた	71 (88.8%)	63 (86.3%)
遊ぶ時間がなかった	57 (71.3%)	51 (69.9%)
睡眠時間が少なかった	70 (87.5%)	61 (83.6%)
食生活が貧しかった	29 (36.3%)	31 (42.5%)
お金がなかった	54 (67.5%)	46 (63.0%)
自己に関するポジティブな出来事		
授業が楽しかった	76 (95.0%)	64 (87.7%)
前から欲しいものが手に入った	55 (68.8%)	62 (84.9%)
勉強が好きになった	42 (52.5%)	53 (72.6%)
異性(恋人)関係がうまくいった	24 (30.0%)	26 (35.6%)
自分に自信が持てた	51 (63.8%)	50 (68.5%)
自分に対する見方が変わった	42 (52.5%)	36 (49.3%)
ほめられた	57 (71.3%)	52 (71.2%)
生活にはりがでた	48 (60.0%)	39 (53.4%)
時間にゆとりがあった	40 (50.0%)	41 (56.2%)
対人関係に関するポジティブな出来事		
クラブやサークルが楽しかった	39 (48.8%)	31 (42.5%)
友人に良いことがあった	58 (72.5%)	54 (74.0%)
友人が増えた	78 (97.5%)	64 (87.7%)
クラブやサークルが充実していた(試合に勝った, 活動がうまくいったなど)	27 (33.8%)	26 (35.6%)
大学生生活が楽しかった	71 (88.8%)	63 (86.3%)
友人関係がうまくいった(仲直りも含む)	58 (72.5%)	57 (78.1%)
異性の友人と楽しくつきあえた	51 (63.8%)	52 (71.2%)

3・5 重視している活動の比較

日常的出来事と同様, 各学期の終わりに, その学期における日常的出来事の実験率を調査しているため, 7月(前期第14回講義)と1月(後期第14回講義)の比較となる(Table8)。

有意差が認められたのは, 全体での「アルバイト」のみであり ($t=-2.01, p<.01$), 1年生のみでは「アルバイト」

に有意差は認められなかった。

3・6 意欲低下・大学適応感に影響を及ぼす要因

特に1年生の前期における大学適応に影響する要因を検討するために, 1年生のデータだけを用いた重回帰分析を行った。1回目調査の全変数を独立変数, 2回目調査の大学適応感, 意欲低下領域を従属変数とした重回帰分析の

Table7 日常的出来事の実験率(1年生)

項目	7月	1月
自己に関するネガティブな出来事		
学業上のこと(試験, レポートなど)で失敗した	49 (79.0%)	38 (80.9%)
自己嫌悪におちいった	39 (62.9%)	33 (70.2%)
自分の能力適性について考えた	48 (77.4%)	34 (72.3%)
将来の職業(選択)について考えた	53 (85.5%)	36 (76.6%)
自分に自信がなくなった	35 (56.5%)	27 (57.4%)
太った	29 (46.8%)	19 (40.4%)
自分の性格について考えた	43 (69.4%)	35 (74.5%)
生活にはりがなかった	32 (51.6%)	28 (59.6%)
計画が実行できなかった	41 (66.1%)	31 (66.0%)
自分の容姿が気になった	42 (67.7%)	30 (63.8%)
対人関係に関するネガティブな出来事		
バイトがきつかった	25 (40.3%)	28 (59.6%)
クラブやサークルでの人間関係がうまくいかなかった	16 (25.8%)	15 (31.9%)
友人関係がうまくいかなかった	26 (41.9%)	22 (46.8%)
恋人が欲しいのにできなかった	29 (46.8%)	22 (46.8%)
友人の悩みやトラブルに関わりを持った	39 (62.9%)	27 (57.4%)
クラブやサークルに不満を持った(試合に負けた, 活動がつまらなかったなど)	17 (27.4%)	15 (31.9%)
大学生活に関するネガティブな出来事		
大学に不満を持った	45 (72.6%)	32 (68.1%)
授業がつまらなかった	54 (87.1%)	43 (91.5%)
大学生活が楽しくなかった	33 (53.2%)	23 (48.9%)
私生活に関するネガティブな出来事		
時間に追われた	54 (87.1%)	40 (85.1%)
遊ぶ時間がなかった	42 (67.7%)	29 (61.7%)
睡眠時間が少なかった	55 (88.7%)	37 (78.7%)
食生活が貧しかった	27 (43.5%)	17 (36.2%)
お金がなかった	44 (71.0%)	30 (63.8%)
自己に関するポジティブな出来事		
授業が楽しかった	60 (96.8%)	42 (89.4%)
前から欲しいものが手に入った	40 (64.5%)	40 (85.1%)
勉強が好きになった	32 (51.6%)	36 (76.6%)
異性(恋人)関係がうまくいった	16 (25.8%)	18 (38.3%)
自分に自信が持てた	39 (62.9%)	32 (68.1%)
自分に対する見方が変わった	32 (51.6%)	23 (48.9%)
ほめられた	45 (72.6%)	34 (72.3%)
生活にはりがでた	40 (64.5%)	26 (55.3%)
時間にゆとりがあった	32 (51.6%)	30 (63.8%)
対人関係に関するポジティブな出来事		
クラブやサークルが楽しかった	30 (48.4%)	19 (40.4%)
友人に良いことがあった	44 (71.0%)	35 (74.5%)
友人が増えた	61 (98.4%)	42 (89.4%)
クラブやサークルが充実していた(試合に勝った, 活動がうまくいったなど)	22 (35.5%)	16 (34.0%)
大学生活が楽しかった	54 (87.1%)	42 (89.4%)
友人関係がうまくいった(仲直りも含む)	46 (74.2%)	35 (74.5%)
異性の友人と楽しくつきあえた	40 (64.5%)	32 (68.1%)

結果を Table9 に示す。なお、投入変数が多いため、分析はステップワイズ法で行った。

意欲低下領域では、学期始めの対応する意欲低下からの影響が認められていた（学業意欲低下 $\beta=.673, p<.001$; 授業意欲低下 $\beta=.665, p<.001$; 大学意欲低下 $\beta=.332, p<.001$ ）。大学適応感では自己表現スキルからの影響が多

く認められた（被信頼・受容感 $\beta=.273, p<.05$; 課題・目的の存在 $\beta=.355, p<.01$; 拒絶感の無さ $\beta=.276, p<.05$; 大学意欲低下 $\beta=-.310, p<.05$ ）。

後期開始時のアパシー心性に影響する要因を検討するため1回目調査全変数および2回目調査の大学適応感、意欲低下領域を独立変数、3回目調査のアパシー心性を従属

Table8 重視している活動の平均と標準偏差

	7月		1月		t値
	平均	SD	平均	SD	
全体					
娯楽	4.02 (1.00)		3.97 (1.04)		0.32
休養すること	3.60 (1.28)		3.73 (1.15)		-0.78
読書	2.85 (1.26)		2.92 (1.33)		-0.40
ダブルスクール	1.81 (0.95)		1.84 (1.06)		-0.24
学業	3.58 (1.17)		3.37 (1.10)		1.50
ボランティア活動	2.02 (1.00)		2.13 (1.03)		-1.12
趣味	4.07 (1.04)		3.90 (0.99)		1.28
サークル活動	2.62 (1.49)		2.43 (1.50)		1.13
交友関係	4.20 (0.94)		3.97 (0.94)		1.75 +
異性関係	3.32 (1.37)		3.22 (1.37)		0.50
アルバイト	3.07 (1.44)		3.40 (1.39)		-2.01 *
家事	2.65 (1.20)		2.85 (1.15)		-1.26
1年生					
娯楽	4.13 (0.88)		3.87 (1.09)		1.50
休養すること	3.63 (1.27)		3.70 (1.17)		-0.30
読書	2.93 (1.20)		2.91 (1.28)		0.10
ダブルスクール	1.80 (0.97)		1.96 (1.11)		-0.94
学業	3.59 (1.22)		3.37 (1.10)		1.20
ボランティア活動	2.07 (1.00)		2.11 (1.02)		-0.35
趣味	4.07 (1.06)		3.80 (1.00)		1.70 +
サークル活動	2.65 (1.48)		2.48 (1.52)		0.96
交友関係	4.17 (0.97)		3.91 (0.98)		1.77 +
異性関係	3.26 (1.42)		3.13 (1.42)		0.51
アルバイト	3.09 (1.49)		3.22 (1.40)		-0.69
家事	2.63 (1.24)		2.87 (1.13)		-1.21

+ $p<.10$ * $p<.05$

Table9 大学適応感・意欲低下領域の重回帰分析結果

従属変数	独立変数			R^2
居心地の良さの感覚(2)	課題遂行スキル .504 ***	大学意欲低下(1) -.284 *	自分探しの場 -.239 *	.405 ***
被信頼・受容感(2)	居心地の良さ(1) .365 **	自己表現スキル .273 *		.279 ***
課題・目的の存在(2)	自己表現スキル .355 **			.126 **
拒絶感の無さ(2)	拒絶感の無さ(1) .527 ***	自分探しの場 -.359 **	自己表現スキル .276 *	.370 ***
学業意欲低下(2)	学業意欲低下(1) .673 ***	消極的モラトリアム .306 **		.518 ***
授業意欲低下(2)	授業意欲低下(1) .665 ***			.442 ***
大学意欲低下(2)	大学意欲低下(1) .332 **	自己表現スキル -.310 *		.270 ***

()の中は調査回数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table10 アパシー心性の重回帰分析結果

従属変数	独立変数			R^2
張りのなさ	大学意欲低下(2) .368 *	居心地の良さ(1) .441 ***	課題・目的の存在(2) -.337 *	.531 ***
自分のなさ	大学意欲低下(2) .213	授業意欲低下(2) .486 ***	被信頼・受容感(2) -.360 *	.643 ***
	居心地の良さ(1) .345 **	会話スキル -.255 *		
味気なさ	大学意欲低下(2) .372 *	拒絶感の無さ(2) -.392 **	被信頼・受容感(2) -.312 *	.590 ***

()の中は調査回数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

変数とした重回帰分析を行った (Table10) . この分析においても, 投入変数が多いため, 分析はステップワイズ法で行った.

張りのなさへは, 大学意欲低下(2) ($\beta=.368, p<.05$), 居心地の良さ(1) ($\beta=.441, p<.001$), 課題・目的の存在(2) ($\beta=-.337, p<.05$) からの影響が認められた. 自分のなさへは, 授業意欲低下(2) ($\beta=.486, p<.001$), 被信頼・受容感(2) ($\beta=-.360, p<.05$), 居心地の良さ(1) ($\beta=.345, p<.01$), 会話スキル ($\beta=-.255, p<.05$) からの影響が認められた. そして, 味気のないさには, 大学意欲低下(2) ($\beta=.372, p<.05$), 拒絶感の無さ(2) ($\beta=-.392, p<.01$), 被信頼・受容感(2) ($\beta=-.312, p<.05$) からの影響が認められた.

次に, 日常的経験との関連を検討するために, 特に経験率の高かった「授業が楽しかった」「授業がつまらなかった」「友人が増えた」「大学生活が楽しかった」の 4 項目に対する経験時の感情と意欲低下領域および大学適応感との相関係数を算出した.

7 月時点では, 拒絶感のなさ(2)と「授業がつまらなかった」に負の相関が認められた ($r=-.316, p<.05$) . また, 「大学生活が楽しかった」は, 課題・目的の存在と正の相関 ($r=.261, p<.05$), 授業意欲低下 ($r=-.293, p<.05$), 大学意欲低下 ($r=-.317, p<.05$) と負の相関が認められた. 1 月時点では, 「授業が楽しかった」と被信頼・受容感に正の相関が認められた ($r=.304, p<.05$) . 「友人が増えた」とは, 居心地の良さの感覚 ($r=.355, p<.05$) に正の相関, 大学意欲低下 ($r=-.454, p<.01$) に負の相関が認められた. 「大学生活が楽しかった」とは, 居心地の良さの感覚 ($r=.403, p<.01$), 課題・目的の存在 ($r=.379, p<.01$) に正の相関, 大学意欲低下 ($r=-.467, p<.01$) に負の相関が認められた.

そして, 年間を通じた大学適応感への影響を検討するために, 1・3 回目調査の全変数, 2 回目調査の意欲低下領域および大学適応感を独立変数, 4 回目調査の大学適応感, 意欲低下領域を従属変数とした重回帰分析を行った (Table11) . 投入変数が多いため, ステップワイズ法を用

いた.

居心地の良さの感覚へは居心地の良さ(3) ($\beta=.831, p<.001$), 将来準備の場(3) ($\beta=-.280, p<.05$) から影響が認められた. 被信頼・受容感へは居心地の良さ(3) ($\beta=.390, p<.01$), 拒絶感のなさ(1) ($\beta=-.555, p<.001$), 大学意欲低下(1) ($\beta=-.537, p<.01$), 消極的モラトリアム(1) ($\beta=.424, p<.001$) から影響が認められた. 課題・目的の存在へは課題・目的の存在(2) ($\beta=.661, p<.001$), 自分探しの場(3) ($\beta=-.594, p<.001$), 課題・目的の存在(3) ($\beta=.342, p<.01$), 被信頼・受容感(1) ($\beta=-.209, p<.01$), 消極的モラトリアム(1) ($\beta=.377, p<.001$), 出会いの場(3) ($\beta=.304, p<.01$), 消極的モラトリアム(3) ($\beta=-.235, p<.01$), 課題・目的の存在(1) ($\beta=-.454, p<.001$), 大学意欲低下(3) ($\beta=-.359, p<.01$), 味気のないさ(3) ($\beta=-.346, p<.01$), 居心地の良さ(2) ($\beta=-.232, p<.05$) から影響が認められた. 拒絶感の無さには, 拒絶感の無さ(3) ($\beta=.741, p<.001$), 将来準備の場(1) ($\beta=-.310, p<.01$) から影響が認められた. 学業意欲低下には, 学業意欲低下(3) ($\beta=.671, p<.001$), 自分探しの場(1) ($\beta=.285, p<.05$) から影響が認められた. 授業意欲低下には, 授業意欲低下(2) ($\beta=.641, p<.001$), 消極的モラトリアム(3) ($\beta=.548, p<.001$), 拒絶感の無さ(3) ($\beta=.315, p<.01$) から影響が認められた. 大学意欲低下には, 居心地の良さ(3) ($\beta=-.779, p<.001$), 課題遂行スキル(1) ($\beta=.421, p<.01$) から影響が認められた.

4. 考察

4・1 意欲低下・大学適応感の変化

授業意欲低下は, 全体でも 1 年生のみでも前期の間に得点の上昇が著しい. また, 1 年生のみでは後期においても有意差が認められていた. したがって, 溝上 (2004) が指摘したように, 1 年生の入学後の授業意欲低下は段階的に進行することが本研究においても支持された. この 1 年前期の変化について, 授業意欲低下の平均評定値は学業意欲

Table11 大学適応感・意欲低下領域の重回帰分析結果(通年)

従属変数	独立変数		R ²
居心地の良さの感覚(4)	居心地の良さ(3)	.831 *** 将来準備の場(3) -.280 *	.642 ***
被信頼・受容感(4)	居心地の良さ(3)	.390 ** 拒絶感のなさ(1) -.555 ***	.621 ***
	消極的モラトリアム(1)	.424 ***	
課題・目的の存在(4)	課題・目的の存在(2)	.661 *** 自分探しの場(3) -.594 ***	.942 ***
	被信頼・受容感(1)	-.209 ** 消極的モラトリアム(1) .377 ***	
	消極的モラトリアム(3)	-.235 ** 課題・目的の存在(1) -.454 ***	
	味気のないさ(3)	-.346 ** 居心地の良さ(2) -.232 *	
拒絶感の無さ(4)	拒絶感の無さ(3)	.741 *** 将来準備の場(1) -.310 **	.635 ***
学業意欲低下(4)	学業意欲低下(3)	.671 *** 自分探しの場(1) .285 *	.522 ***
授業意欲低下(4)	授業意欲低下(2)	.641 *** 消極的モラトリアム(3) .548 ***	.725 ***
大学意欲低下(4)	居心地の良さ(3)	-.779 *** 課題遂行スキル(1) .421 **	.573 ***

()の中は調査回数

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

低下や大学意欲低下よりも低い値を示しており、大学の授業に対する期待が大きかったことがうかがえる。しかし、実際には、必ずしも期待通りの授業が展開されるわけではなかったことや、履修に対する不自由度などに対して、半澤（2007a）の提唱する学業に対するリアリティショックを受けたのではないかと考えられる。そのため、特に1年前期での授業意欲低下の変化が生じたのであろう。

大学適応感では、被信頼・受容感が前期の間に上昇し、逆に拒絶感の無さは前期の間に下降していた。そして、他の尺度も含め後期での変化は認められず、前期の終わりの時点での水準が維持されていた。これは1年生のみの結果で顕著であった。この結果を大学適応という観点から見ると、初期、特に1年前期での大学適応の状態が、その後もほぼ維持されることを意味するのではないかと考えられる。被信頼・受容感の上昇は、新しい環境における対人関係は生活リズムが構築されていった結果であるといえよう。逆に、拒絶感の無さの下降は、大学入学当初は、比較的表面的な付き合いが主であったのに対し、次第に内面的な付き合いが増えるようになったため、他者の対応に対する反応が変化したと考えられる。

4・2 大学観の変化

溝上（2004）は大学観として「勉強する場」として大学をとらえる考え方が高く維持されることを指摘した。本研究においても大学を勉強の場とする大学観の得点は有意に減少しているが、他の大学観よりも高い水準を維持している。特に1年生では、出会いの場以外の大学観は有意または有意傾向の変化を示している。大学に入学する前のイメージでは消極的モラトリアムを過ごす場以外の大学観が4以上の高い値を示していたのに対し、実際に大学生活を送った結果、価値観の変化を生じ、4以上の値を示すが、勉強の場と将来準備の場のみになったのであろう。

消極的モラトリアムを過ごす場は、唯一上昇しているが、中点である3よりも低い値を示し、大学観としてはもっとも低い。しかし、あまり大学の機能に価値をおいているとはいえない価値観であるため、この値が上昇することは、大学生活に対する積極的な関与が乏しくなることを意味するとも考えられる。

4・3 日常的出来事の実験率、および重視している活動の変化

外山・桜井（1999）では、ほとんどの項目が実験率50%以上であったのに対し、本研究では、上は98.4%、下は25.8%と上下のばらつきが大きい。これは工科大教職課程履修生という調査対象者の偏りに由来するものと考えられる。特に、クラブ・サークル関連の出来事に関する4項目に対する実験率において50%を超える項目が存在

しておらず、先行研究における調査対象と比較してクラブ・サークルに所属していない学生の割合が高かったのではないかと推測される。

また、重視している活動の変化について、有意差はほとんど認められなかった。平均評定値を見ると、交友関係、趣味、娯楽が4を超えており、ほとんどの学生が特に重視しているといえよう。そして、休養することと学業がその次に位置しており、学業を比較的重視する姿勢がうかがえる。そして、サークル活動については中点である3以下の値を示しており、日常的出来事の実験率の結果からもうかがえるように、あまりサークル活動に重点を置いていないことが重視している活動の結果からも示された。

4・4 意欲低下・大学適応感に影響を及ぼす要因

前期のみの重回帰分析結果と通年で重回帰分析結果を比較すると、影響を持つ変数がかかなり異なっている。これは入学当初の適応に影響を持つ要因と、ある程度環境への適応が進んでから影響が大きくなる要因が異なることを意味すると思われる。

入学当初は、自己表現スキルが大学適応感や意欲低下に影響をもたらしていた。これは新規な環境においては新たな対人関係を築く努力をする必要があり、そこでは適切に自分を伝えていくことが求められる。そのため、対人関係を築くためスキルの影響が大きかったのであろう。

それに対して後期では、居心地の良さの感覚が大きな影響をもたらしていた。これは前期の間に構築された対人関係が良好であると、大学適応が進み、意欲低下が抑制されることを表すと考えられる。特に、大学適応感では後期始めの状態からの影響が強い。すなわち、前期の間に形成された適応状態が後期における適応に影響をもたらすといえよう。また、後期の間に友人が増えた時の感情と居心地の良さの感覚との間に正の相関が認められていることもその証左となるであろう。

このように、前期と後期では影響をもたらす要因が大幅に異なる。これは、前期では、環境に積極的に関与していくことで適応していくのに対し、後期では現在の環境との相互作用により適応状態が影響を受ける。すなわち、前期では環境への初期適応を行うための努力を要し、その努力の状態によって初期適応が決定してしまうのだと考えられる。前期のみ、後期のみで比較すると、前期は適応状態の変化が大きいのに対し、後期は変化に乏しいということも、初期適応への関与の状態が、個人ごとに大きく異なるということで解釈するのが妥当であろう。

初期適応への努力と考えると、大久保・青柳（2005）の指摘についてもある程度の説明が可能である。大久保・青柳では、入学時の社会的スキルは後の大学適応の予測因としては不十分であると指摘していた。これは、社会的スキ

ル(本研究では自己表現スキル)は初期適応を進めていくために必要となる要因ではあるが,初期適応が落ち着くと,その適応状態の方が後の適応への影響をもたらすようになるためと考えられる。

こうした初期適応に重要な自己表現スキルと,ある程度落ち着いた適応状態である居心地の良さの感覚の影響を大きく受けていたのが大学意欲低下と被信頼・受容感である。自己表現スキルに乏しいと,初期適応がうまくいかず,大学生活になじむことができない。そのため,環境に受け入れられている感覚は得られず,大学に対する不適応を示すようになる。そして,それが後期始めの居心地の良さの感覚となって現れ,後期の大学適応の変化(大学意欲低下,被信頼・受容感)への影響をもたらしたのであろう。

アパシー心性も4月よりも7月の状態からの影響が大きく,これは初期適応が進んだ夏休み前の状態の方が後期への影響をもたらすといえる。特にアパシー心性には大学意欲低下からの影響が大きい。下山(1995)では,アパシー心性から大学意欲低下への因果モデルが示されているが,本研究では逆の因果関係を想定している。初期適応から導かれるアパシー心性としてとらえると,本研究のように初期適応状態として大学意欲低下からアパシー心性への因果関係を想定するのが妥当であらう。

5. おわりに

本研究では,1年を通した縦断研究によって大学適応感の変化について検討した。その結果,特に1年前期での変化と1年後期での変化には,異なる要因が作用することを明らかにした。

1年前期というのは,新規な環境に対する適応が求められる。そのため,環境作りとしてのスキルが重要な役割を果たす。しかし,1年後期では,前期の間に構築した環境の居心地の良さが適応状態が大きな影響を持つ。すなわち,前期における初期適応の状態が後期の大学適応を左右するといえる。

したがって,順調に大学に適応していくためには,まず大学入学直後の初期適応を進める必要がある。しかし,初期適応に必要な自己表現スキルには個人差が大きい。そこで,新入生に対して,この自己表現スキルを補うよう

な働きかけをすることが,長期的に見ても新入生に対する適応支援として有効な方法ではないかと考えられる。

引用文献

- 半澤礼之 2007a 大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の作成 キヤリア教育研究, **25**, 15-24.
- 半澤礼之 2007b 大学生の学業に対するリアリティショックと学業適応(1) —大学進学動機による学業に対するリアリティショックの差異— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 490.
- 岩田弘三・北條英勝・浜島幸司 2001 生活時間調査からみた大学生の生活と意識—3 大学調査から— 大学教育研究(神戸大学大学教育研究センター), **9**, 1-29.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 溝上慎一 2004 大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲— 京都大学高等教育研究, **10**, 67-87.
- 大久保智生・青柳肇 2003 大学生用適応感尺度の作成の試み——個人—環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, **12**, 38-39.
- 大久保智生・青柳肇 2005 大学新入生の適応に関する研究—社会的スキルは後の適応を予測するのか?— 人間科学研究, **18**, 207-213.
- 太田伸幸 2004 大学適応感の変化と対人関係認知との関連 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 160.
- 太田伸幸 2006 意欲低下に関わる要因の検討 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 123.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, **43**, 145-155.
- 杉浦健・尾崎仁美・溝上慎一 2003 大学は何をする場所? (1) —大学生の大学観と大学生のあり方との関連について— 日本心理学会第67回大会発表論文集, 1198.
- 外山美樹・桜井茂男 1999 大学生における日常的出来事と健康状態の関係—ポジティブな日常的出来事の影響を中心に— 教育心理学研究, **47**, 374-382.
- (受理 平成20年3月19日)